

照井氏所蔵『エマーソン論文集上巻』の「宮澤トシ肉筆メモ」

水野達朗

—

花巻農学校で宮澤賢治の教えを受けた照井謹二郎氏は、かつて「妹トシの落書」という文章で、昭和七年の新春に病床の賢治を見舞ったさい、賢治から二冊の本を贈られたことを報告している。⁽¹⁾それによると、贈られた二冊の内、『エマーソン論文集 上巻』（戸川秋骨訳、玄黄社、明治四十四年）の表紙裏には、「責善寮 宮澤敏子⁽²⁾」という署名があり、「トシ子さんが書いた」鉛筆・墨・ペンの「落書き」が本の随所に見られるほか、「四分の一よりも、やや小さい」、「ザラ西洋紙の罫紙の裏」に墨で書かれた「トシ子さんの肉筆のメモ」も挿まれている。照井氏はこの本を「妹トシ子さんの愛読本」と見ている。

平成十一年七月、照井氏のお宅に伺い、この本の実物を見せて頂いて、「署名」と「落書」と「メモ」の存在を確認した。⁽³⁾

「落書」に関しては、右の「妹トシの落書」にその一部が活字化されている。そこに挙げられていないものも、挙げられたものも、書中の語彙等を取りとめなく書き連ねた、文字通りの「落書」なので、ひとまずは本稿の対象外とする。「メモ」に関しては、「妹トシの落書」ではその存在のみが紹介されている。しかし、そこで照井氏が触れている、「四分の一よりも、やや小さい」、「ザラ西洋紙の罫紙の裏」に書かれたものに加え、同じ大きさ・種類の紙の、表裏両面にわたって書かれたものが更に一枚ある。一枚目の末尾は二枚目の冒頭に接続しており、両者はひと続きの「メモ」を成しているといえる。それらはいずれも、毛筆のくずし字で書かれている。

この「メモ」に関して、左に私の判読結果を掲出する。「は」と「ハ」の併用は、表記の不統一と見られるが、原文のまま残した。漢字は、原則として現行字体に改める（以下同じ）。

「二枚目」

1

史上の天才と修養とを有したりしいか／なる婦人も皆想像を充たすに足らず／一人もその心に適ふものなしとするは／何ぞや正しく彼女自らが其心に適ふ／ものに非ずや　彼女ハ新しき未だ／試みられたる事なき問題を解決せ／むとするなり、恐らくハこれ実に従来／咲き香ひたる花の最も佳絶なるもの／なるべし、願はくハ女子をしてその／心靈を直立せしめ、其途を行くや心爽／かに新たなる経験より一々その注意／を受け更に己れの眼に映ずるものハ／一々これを探求し、かくて自らの新に／生れたる其存在は即ち空間の諸々／の片隅に新曙光を点火する威力／と魔力とを有するものなる事を知ら／しめよ

「二枚目の第一面」

2

貴なる心を以て観者に感銘を与ふ／るものなり、緘黙せる心情ハ彼女に力を添ふ／あゝ友よ、恐怖に對し

て帆を捲く／勿れ、雄姿堂々として湊に來れ、／若くハ神と共に海上を航行せよ／卿の生命ハ無用なるものに非ず／何となれば過ぎ行く人の眼ハ卿／の面影によりて樂しまされ、又そ／の心を清うすることを得ればなり

○常に汝の行ふ事を憚る処のもの／を行へ。

○吾人の威嚴に關しても寛容なれ／偉大なるものハ永久に全く世の意見なるものを放棄せり。

○勇壯とハ心の平衡を得たる人の謂にして／いかなる攪亂も其意志を動かす能はず／快く又殆ど樂しく自ら奏する音楽の／調子に従ひて進み驚目すべき恐慌にも／

「二枚目の第二面」

放縱にして酔へるが如き樂みの内に／も等しき心を有するものなり

From

“Heroism”

以上が、照井氏所蔵『エマーソン論文集 上巻』に挿まれた「メモ」の全文である。

ではこの「メモ」は、いかにして成立したのだろうか。この点を考える上で看過できないのが、最後にFrom "Heroism"と記されていることである。『エマーソン論文集 上巻』は、エマンソンの *Essays First Series*(1841) を訳したものが、うち八番目の「勇壯論」の原題は "Heroism" である。『エマーソン論文集 上巻』の「目次」には、収められた各文章に關し、日本語の題名の下に、「勇壯論 (Heroism)」というように、括弧に入れて英語の原題が記されているので、この本の読者は原書を参照しなくとも、英語の原題を知ることができる。とする¹⁾と、「メモ」の最後にFrom "Heroism"とあるということは、「メモ」の内容は、『エマーソン論文集 上巻』の「勇壯論」からの抜書きであることが予想される。

調べてみると、「勇壯論」に次のような記述が存在している(傍線は水野)。英語の原文とともに掲げる。

【引用A】

かれ等青年は前例を有せず、知友を有せず、而して遂に喪心す。而して其後は如何。然れどもかれ等が当初の熱望の内に示せし教はその真実なる事を失はず、されば後年に至りさらに勇氣あるものさらに清き真理を懐抱する

もの来りて、かれ等が信仰せし処を組織してこれを建立する事あらん。さらに婦人に就て見るに、何故に婦人は自からを史上の婦人に比しサツフオーもセヴィニエも、ド、ステールも抑も亦天才と修養とを有したりし寺院の婦人等もみな想像を充たすに足らず、高潔なるシミスも亦これを充たすに足らざるの故を以て、遂に一人もその心に適ふものなしとするは何ぞや——正しく彼女自からはその心に適ふものならずや。豈にそれ自からはその人ならずや。彼女は新らしき未だ試みられたる事なき問題を解決せんとするなり、恐らくはこれ実に従来咲き香ひたる花の最も佳絶なるものなるべし。願はくは女子をしてその心靈を直立せしめ、その途を行くや心爽かに、新らたなる経験より一々その注意を受け、さらに己の眼に映ずるものは一々これを探求し、かくて自からの新らたに生れたるその存在は、即ち空間の諸々の片隅に新曙光を点火する威力と魔力とを有するものなる事を知らしめよ。花の如き小女にして、裁然として自から負ふ処高く己の力に依れる選定を重んじて、他の干渉を排斥し、人を悦ばす事を顧慮せず、而も高潔にして意志固きものは、即ちその高貴なる心を以て觀者に感銘を与ふるものなり。緘黙せる心情はかの女に力を添ふ、ア、友よ、恐怖に對して帆を捲く勿れ。雄姿堂々として湊に来れ、若くは神

と共に海上を航行せよ。卿の生命は無用なるものにあら
ず、何となれば過ぎ行く人の眼は卿の面影に依りて榮ま
られ、またその心を清からす事を得ればなり。

(四二九—四三二頁)

They found no example and no companion, and their heart
fainted. What then? The lesson they gave in their first
aspirations is yet true; and a better valor and a purer truth
shall one day organize their belief. Or why should a woman
liken herself to any historical woman, and think, because
Sappho, or Sévigné, or De Staël, or the cloistered souls who
have had genius and cultivation do not satisfy the imagination
and the serene Themis, none can, — certainly not she? Why
not? She has a new and unattempted problem to solve,
perchance that of the happiest nature that ever bloomed. Let
the maiden, with erect soul, walk serenely on her way, accept
the hint of each new experience, search in turn all the objects
that solicit her eye, that she may learn the power and the
charm of her new-born being, which is the kindling of a new
dawn in the recesses of space. The fair girl who repels
interference by a decided and proud choice of influences, so
careless of pleasing, so willful and lofty, inspires every
beholder with somewhat of her own nobleness. The silent

heart encourages her; O friend, never strike sail to a fearful
Come into port greatly, or sail with God the seas. Not in vain
you live, for every passing eye is cheered and refined by the
vision.
(pp. 259 - 260)

【引用B】

卿等宜しく己の行為に固着せよ、而して異常にして法外
なる事をなし、常規を重んずる時代の単調を破るが如き
事あらば自からこれを祝せ。余は嘗て青年に与へられる
訓誡を聞きて頗る高尚なるものと思へり。曰く、常に汝
の行ふ事を憚る處のものを行へ、と。單純にして男らし
き人物は決して弁疏を為さず、その過去の行為を觀るに
フォシオンの冷靜を以てす、フォシオンは戦争の有利な
りしを見たるも、自からこれに参加するを辞したりし事
を悔ひざりしなり。

「略」自然は余が他に対して何等不利の点を有せず、人の
嘲笑を博すものたらずとの契約を為せし事ありや。(必ら
ずしも然らじ) 左れば吾人は金錢に關して寛容なると共に
吾人の威嚴に關しても寛容なれ。偉大なるものは永久
に全く世の意見なるものを放棄せり。吾人は慈善を重ん
ず、それはこれに依りて賞められんがためにもあらず、は
たその慈善が偉大なる巧果を有すべしと考ふるが故にも

あらす、只これ己の為すべき処なればなり。(四三二—四三三頁)

Adhere to your own act, and congratulate yourself if you have done something strange and extravagant and broken the monotony of a decorous age. It was a high counsel that I once heard given to a young person, — “Always do what you are afraid to do.” A simple manly character need never make an apology, but should regard its past action with the calmness of Phocion, when he admitted that the event of the battle was happy, yet did not regret his dissuasion from the battle.

[...]Has nature covenanted with me that I should never appear to disadvantage, never make a ridiculous figure? Let us be generous of our dignity as well as of our money. Greatness once and for ever has done with opinion. We tell our charities, not because we wish to be praised for them, not because we think they have great merit, but for our justification. (pp.260 - 261)

【引用C】

凡そかくの如き外部の悪に対し、人はその胸裏に戦闘的態度をとり敵の無限なる軍隊に対し隻手これを迎ふるの力量ある事を自任せざるべからず。かくの如き心靈の軍

事的態度に与ふるに吾人は勇壮の名を以てす。「略」そはまた細慮なる制縛を軽視する自在の精神にして其受くる処の損害を賠うに足るべき氣力と元氣とを十分に己に有するの故を以て然るなり。されば勇壮とは心の平衡を得たる人の謂にして、如何なる攪乱もその意志を動かす能はず、快よくまた殆んど楽しく、自から奏する音楽の調子に従ひて進み、驚目すべき恐慌にも放縱にして酔るが如き樂みの内にも等しき心を有するものなり。「略」勇壮なるものは己以外の他の心靈も亦己と等しき性質を有する事を知らざるもの如く、自負の念を有し、極端なる個人性を有す。

(四一六—四一七頁)

Towards all this external evil the man within the breast assumes a warlike attitude, and affirms his ability to cope single-handed with the infinite army of enemies. To this military attitude of the soul we give the name of Heroism.[...]

It is a self-trust which slights the restraints of prudence, in the plenitude of its energy and power to repair the harms it may suffer. The hero is a mind of such balance that no disturbances can shake his will, but pleasantly and as it were merrily he advances to his own music, alike in frightful

alarms and in the tipsy mirth of universal dissoluteness. [...] it seems not to know that other souls are of one texture with it; it has pride; it is the extreme of individual nature. (p.250)

前節に挙げた「メモ」の内容は、右に傍線を施した部分を、多少の表記の改変はあるものの、ほぼそのまま繋ぎあわせて作成したものと(5)いうことができる。

三

「メモ」に抽出された記述部分は、「勇壮論」において、いかなる文脈の中に置かれていたものなのだろう。

この「勇壮論」(“Heroism”)とどうハッセイは、題名の示す通り「勇壮」(heroism)の徳を称揚したものである。人生とは常に、さまざまな害悪や災厄に対する戦いであると述べたあとエマソンは、右の【引用C】の部分に至り、「勇壮」の定義を示している。「凡そ」から「以てす」までの記述に示される通り、「外部の悪」(this external evil)に対する「戦闘的態度」(a warlike attitude)が、「勇壮」であるところである。「勇壮」の宿るのは、「胸裏」(within the breast)即ち「心の内部」であり、悪に支配される「外部」に対し、これと戦う「内部」(6)の意志が強調されているわけである。この脈略で、「メモ」に

採られた「勇壮とは心の平衡を得たる人の謂にして」以下の部分が、現われる。外部からもたらされる「攪乱」(disturbances)や「恐慌」(alarms)にも動じない強い精神こそが、「勇壮」の内実とされているのである。それはまた、「自在の精神」(self-trust)、「自負の念」(pride)、「極端なる個人性」(the extreme of individual nature)とも言い換えられる。

続けてエマソンは、「自信は勇壮の神髄なり。それは神霊が戦争の状態をとるものにして、その究極の目的は虚偽と不正とに対し最後の挑戦をなし、又悪の働きに依りて加へらるゝ、凡ての事に堪ゆるの力たるにあり。」(四一九頁)“Self-trust is the essence of heroism. It is the state of the soul at war, and its ultimate objects are the last defiance of falsehood and wrong, and the power to bear all that can be inflicted by evil agents.”(p.251-252)とも、「勇壮の働くや全人類の声に背馳しまた時には偉人善人の声にも背馳す。勇壮は個人の性格の奥より出る衝動に服従せるものなり。」(四一八頁)“Heroism works in contradiction to the voice of mankind and in contradiction, for a time, to the voice of the great and good. Heroism is an obedience to a secret impulse of an individual's character.”(p.251)とも述べる。このように、外部から襲う「虚偽」や「不正」や「悪の働き」に抵抗する「勇壮」とは、あくまでも「個人の性格の奥」に根拠を持つものであり、他人の意見に、更に世間で「善」

とされるものすら、「背馳」するといふのである。

エマソンは或る所で、卓越した才能と思想を持つ青年達が、社会生活に入った途端平凡になることを惜しみつつ、【引用A】のような記述を展開している。この部分が、トシが「メモ」に抽出したエマソンの言葉の大半を占めるが、トシが取り入れた傍点部分は、特に若い女性達の生き方について述べたものである。「勇壯論」のうち特に、エマソンの描く青年像、就中、女性像の部分を、トシが取り出していることは興味深い。ここでエマソンが描くのは、歴史が偉人と定めた過去の女性達の生き方に満足せず、自らの力で新しい可能性を拓こうとする女性像である。特に、「願はくは」以下の部分に示される通り彼女達は、過去の偉人からではなく、自らの「新たなる経験」(new experience)から教訓を得て成長し、「自からの新たに生れたるその存在」(her new-born being)を獲得していくとされる。トシが抽出した部分には、このように、女性の自己修養のプロセスが具体的に指示されている。「経験」に学ぶことで「新たに生れ」変わるといふ表現も印象的である。

またこれに続く部分で、「他の干渉を排斥し、人を悦ばすことを願ふせず」(「The fair girl who [repels interferences]...], so careless of pleasing, [...]」)という態度が推奨されているのは、他人の意見や世間の規範に背いてでも、自己内部の良心に従うという、先に見た「勇壯」の在り方をなぞるものといえる。こ

こも、トシの「メモ」に入れられている。トシが「メモ」に取り入れた記述としては、このほか、【引用B】がある。ここでもエマソンが、「常規を重んずる時代」(a decorous age)に逆らうべき事を説いて持ち出した、「常に汝の」以下の「訓誡」を、トシは自分の「メモ」へと書き抜いている。また同じくトシが書き抜いている、「人の威厳に関しても」以下の部分も、他人の評価がどうあろうと、それを基準としないで行動することを説いた文脈におけるものである。こうした抜き書きの仕方から、世間や他人の思惑に抗して生きるという点に、トシの関心の一端が向けられていることが窺われる。

四

では、「メモ」に示されたエマソンの言葉への関心は、当時のトシの境遇や精神状態と、どのような関連があるのだろうか。

今見ている「メモ」が挿まれた『エマソン論文集』の表紙裏には、本稿の初めに触れた通り、「責善寮 宮澤敏子」と署名されている。「責善寮」とは、トシが日本女子大在学中に居住した寮であるから、トシがこの本を読み、「メモ」を作成したのも、この時期と推定することができる。この時期の心境を、卒業後にトシ自身が回顧した記述として、通常「自省録」と呼ばれているテキストがある。「自省録」の日付は、大

正九年二月九日であり、宮澤トシが「日本女子大学校を卒業してから花巻高等女学校教諭になるまでの、一時体力が回復しかけた時期」⁽⁷⁾にあたる。また「自省録」の初めにトシは、「此の四五年來私にとって一番根本な私の生活のバネとなったものは、『信仰を求めると云ふ事であった』(一四二頁)と記している。「此の四五年來」とは、トシの「日本女子大学在学の年とびつたり符合」⁽⁸⁾している。

トシは「自省録」の中で、信仰を求めた「四五年來」の生活を、何故か「無理な不自然な努力緊張の生活」、「努力に緊張し、精神に駆り立てられた生活」と、反省的に捉えている(一四二—一四四頁)。

私は魅力ある言葉をたづねる事に漸く倦きて来た。私の日記には統一を求め調和を求め、自己を精進の道に駆り出す励ましの言葉がくりかへし繰り返し書かれた。そして私は疲れて来た。弱い糸を極度まで張った様な一昨年の末の状態はついに、身体の病となって現はれた。それは当然の結果である。(一四三頁)

ここには、信仰生活の中にあるトシが、「魅力ある言葉」、「自己を精進の道に駆り出す励ましの言葉」を見つけ、心の支えにしていたことが示されている。そうした「言葉」たち

に「駆り出」され「駆り立てられ」るように、「努力」と「緊張」へと自分を追い込んだことが、病氣の原因として反省されているのである。ここで注目されるのは、日本女子大時代のトシの求道生活が、「魅力ある言葉」、「自己を精進の道に駆り出す励ましの言葉」を媒介として営まれていたということが、当のトシ自身に、自覚されているということである。本稿で検討している「メモ」も、それらの「言葉」を採集するプロセスの中で作成されたものと見ることが出来る。では、エマソンの言葉がどういう意味で、「魅力」となり「励まし」となったのだろう。

この時期をトシは、不自然な「努力」と「緊張」の生活と回顧しているわけだが、「自省録」では更に、当時そうした生活を選んだ理由を、自ら分析している。「五年前から私の心身に深く食ひこんでゐたもの」が背景にあり、「意志を以てこの力の影響に抵抗を試みた」ものが、「五年間の不自然な苦しい努力の生活」だというのである(一四四頁)。

ここに言う「五年前」、花巻高女在学中に起きたのが、男性教師との恋愛事件であり、「自省録」の大半を占める、自己を「彼女」という三人称に客観化した部分に、その経緯と当時の心情とが記されている。そこでトシは、男性教師との関係が誤解を受け、世間の誹謗に曝されたことに対し、自分には「人人の思ふ様な疾しさも暗さもない」と信じ、「無理解な世間に

対する憤り」を覚えた、当時の心境を回顧している。「こんな不当な圧迫に負けて潰されてなるものか」という「反発心」とともに、「私は生きる」と云ふ勇氣」が自分の内に生じ、「正しいと云ふ自信」で自らを支えたというのである（一六四頁）。そして、「それ以後の彼女には信仰にわが安立の地を見出さうと云ふ焦燥の時間が永く来て、ついに現在に及んでゐる」（一六五頁）とあるように、先に見た「五年間の不自然な苦しい努力の生活」とは、そうした「反発心」と「勇氣」との延長線上に営まれたものとわかる。

このように、「メモ」が作成されたと考えられる日本女子大在学中トシは、世間に対する「憤り」と「反発心」の中で、「正しいという自信」と『私は生きる』という勇氣」を育んでいたという。この、世間の圧力に抗する「自信」と「勇氣」こそ、「自信は勇壯の神髓なり」と言うエマソンが、繰り返し説いているものだが、前節に検討した通り、トシの「メモ」にも、エマソンの「勇壯論」のうち、他人の意見や世間の迷惑と背馳しても、自己内心の眞実を貫く生き方を説いた記述に、抜粋が集中しているという傾向が見られた。トシが過去の恋愛事件を引き摺り、特に世間の無理解による苦しみの中にいたとき、「メモ」に引かれたエマソンの言葉が、他人の迷惑に抗して強く生きよと、意志的な努力に駆り立てる「魅力ある言葉」の一つとして、機能していたことが窺える。

さて、「メモ」と「自省録」との関わりには、もう一つ別の側面もある。次に見るのは、「自省録」の営みに関し、その目的をトシが自ら記している所である。そこでトシは、これまでの「束縛」から逃れ、「新たに生れ変りたい」ために、過去の自分を直視するのだと述べている。そしてそのさいの関心は、過去の経験から、「何を教へられ如何なる思想や力を与へられる事が出来るか」という点に向けられている（一四七—一四八頁）。過去の出来事から「教えられる」こと、それを通じて（新たに生まれ変わる）こと、この二つの願いは、次の記述に端的に現われている（傍線水野）。

私は自分を知らなければならぬ。過去の自分を正視しなければならぬ。悪びれずに。

五年前に遭逢した一つの事件によって、私に与へられたものが何であつたかその教へる正しい意味を理解し旧い自分を明らかに見、ひいて私の未だ償はずに居るものを償ひ恢復すべきものを恢復して新しい世界にふみ出したい、過去の重苦しい囚はれから脱し超越して新しい自分を見出し度い、善かれ悪しかれ自分を知る事によって、私は自由をとりかへす事が出来やう。（一四七頁）

このあと、自己を「彼女」と客観化して、過去の恋愛事件

を振り返る部分でトシは、問題の男性との交際には、「感情の惑溺」(一六一頁)や「利己的な動機」(一六七頁)があり、また、たとえ疾しい事がなくとも、「此の様な行為は世間的には何を意味するものか」を考えない行動は、非難されて「当然」だと内省している(一六六頁)。そしてこの経験が、「墮落」に対する自己の弱さを自覚させ(一七〇頁)、「本当の謙遜」に気づかせてくれた(一二二頁)とし、「殆ど恢復するみちもななく救はれない事のように思はれたあの経験が彼女にどれだけ教へたか」(一七五頁)に思いを致している。

こうした自己反省を経た上で、「彼女はこれからもいつ衆人の中で彼女の痛いきづにふれられ軽蔑をうける事があるかも知れない」が、「彼女には外面から受ける箭に不死身な何ものかがあるに違ひない」から、「それは最早彼女の全生命を傷つけるには足りない」と述べる(一七四頁)。そうして、「恢復された人生に対する勇氣と自由」(一七六頁)を自らに確認するところで、「自省録」は閉じられる。書くことで「恢復」された「人生」。

このように「自省録」の記述は終始、過去の出来事から(「教えられ」、それを通じて(「新たに生まれ変わる」という課題の実践として、行われている。前節に見た通り、エマソンの「勇壯論」からトシが「メモ」へと抜粋した部分には、自らの「新たな経験」(new experience)から教訓を得て成長し、「自か

らの新たに生れたるその存在」(her new-born being)を獲得していく、自立した女性の自己修養の在り方が説かれていた。「自省録」の記述のありようは、結果的に、エマソンの「言葉」が指し示す自己修養の方向性をなぞる形で、成立しているといえる。

ここでトシはまた、過去の反省から「教え」られ、「恢復」された自分は、「衆人」の「軽蔑」に曝されても、もはや「不死身」なのだと述べ、新たな「勇氣」を自己の内部に見出し、ここでもやはり、世間の誹謗に負けない強い自己を得ることが、「自省録」を書くという行為の目的として、自覚されているのである。先に見た通り、日本女子大時代のトシは、恋愛事件以来の世間との葛藤に苦しみながら、他人の思惑に抗する勇氣と自信をもとて説く、エマソンの言葉を「メモ」に抜き出していた。「自省録」を書く時点でトシは、これも先に見た通り、女子大時代の無理な緊張と努力とを反省しているのだが、世間に屈しない自己の確立という志向そのものは、この時点でも強く保たれ、それが「自省録」を書くという行為を支えていることがわかる。

以上のように、エマソンの言葉は、日本女子大時代のトシに強い自己を求めさせる「魅力ある言葉」の一つとして機能し、卒業後の「自省録」における自己分析の試みそのものにも関与していたと見ることが出来る。照井氏が所蔵する『エ

マーソン論文集』に挿まれた「メモ」は、そうした経緯を示すものといえるだろう。

注

(1) 照井謹二郎「妹トシの落書」『啄木と賢治』一九七六年一月、三六一—三八頁。

(2) 責警察とは、賢治の妹である宮澤トシが日本女子大在学中に居住した寮の名である。

(3) 照井氏より拝見した時点でこの本には他に、「署名」・「落書」・「メモ」の三者とは別の筆跡による覚え書きが、随所に挿まれた白又はピンクの短冊に見られ、本文には鉛筆による傍線が引かれていたが、これらは、この本を譲り受けた照井氏(自身)が、この書を精読されたさいに書き込まれたものということである。宮澤トシ関連のものとは区別されるべきものであり、本稿で検討することは控える。

とはいえ、その覚え書き・傍線は、この書を読まれる際の照井氏の関心の所在を示しており、日本でエマソンが実際に読まれた現場の証跡として、更には、賢治と照井氏との、エマソンを介した精神的な響き合いの記録としても、意義があると思われる。私と交わして下さった会話の中で、照井氏がエマソンに關し、文章の「鋭く突きつけるような調子」に「日本人にはない精神」が感じられ、この点が賢治を彷彿させるといふ趣旨の

感想を述べられたことは、強く印象に残っている。照井氏に感謝する。

(4) 原文の引用は、*The Complete Works of Ralph Waldo Emerson, Vol.2, New York: AMS Press, 1968* より行い、本文中にその都度頁数を示す。

(5) 照井氏所蔵本の該当頁には、メモと対応する部分に、色鉛筆による傍線が引かれていた。四二九頁から四三三頁までの部分は、赤鉛筆。四三二頁の上余白右端に、丸で囲まれた「メモ1枚目」という書き込みがある。「メモ」の部分は赤鉛筆と黒鉛筆の重ね書き。「1枚目」の部分は黒。四三三頁上余白に鉛筆で「メモ」とあり、「吾人の」以下の傍線部分に線で結ばれている。鉛筆で書かれたその「メモ」の字の左上に、赤鉛筆で同じく「メモ」とある。四一七頁の傍線は紫鉛筆で引かれ、「勇壯とは」から「意志を」までの部分のみ、赤鉛筆の線で重ね書きされている。同頁の上余白中央に「メモ2枚目」とある。紫鉛筆に黒鉛筆で重ね書き。「メモ」のみ丸囲み。

この本のうち、色鉛筆による傍線はこの部分のみであり、照井氏に確認したところ、これらは自分が引いたのではないとのことである。実際、これらの傍線と書き込みは、「メモ」の内容と直接の関連を持つものであり、照井氏が読書の過程で引かれた、先述の鉛筆の傍線とは、性質を異にする。

(6) “The man within the breast”は、右の戸川訳では、“The man”までを主語と見て、「人はその胸裏に」と訳されているが、この

部分全体を主語と見て、「胸裏に潜む人は」とするのが正しいと思われる。続く一文で、この「人」の「戦鬪的態度」が、「心靈の軍事的態度」(his military attitude of the soul)と言ひ換えられており、「胸裏に潜む人」とは即ち「心靈」のことと解される。戸川の訳には他にも、細かい所で意を尽さない訳が散見されるが、論述の流れじたいを別のものにしてしまうほどの差異は生じていないので、いちいちあげつらうことはしない。

(7) 宮沢惇郎『伯父は賢治』(八重岳書房、一九八九年)一一三頁。以下「自省録」の引用は、この書の「宮沢トシ自省録原文」から行い、頁数を文中に記す。引用文中、かな表記はこの書のま

(8) 山根知子「宮沢トシ『真実ノ道ノ勇進』——日本女子大時代の求道性を中心に——」『成瀬記念館』(日本女子大学成瀬記念館)一九九五年十二月、五四頁。なお山根氏はこの論文や続く諸論文で、トシの思想と信仰の形成に対する、日本女子大における成瀬仁蔵の人格教育の関与の在り方を検討し、海外の文学者・思想家らとトシとの出会いも、成瀬の紹介を契機としたものである可能性を指摘している。